

# 偶然の発見と、仏像を三度にわたって 取り上げる

上野邦一  
(奈良女子大学教授)

## 1. バンテアイ・クデイでのこれまでの調査

土に埋められていた仏像を、三度にわたって取り上げました。その状況をなるべく的確に伝え、考える材料を提供したいと思います。発掘した時の考えやどのような感触があったのかという、発掘に携わった人間にしか分からないことを中心に報告したいと思います。

初めに、なぜこのような発見に至ったかという点を述べます。1991年の3月からバンテアイ・クデイでの発掘調査が始まりました。バンテアイ・クデイのなかに前柱殿と呼んでいる建物があり、その近辺を約10年間にわたって調査を行いました。調査の目的は、地下の様子がどうなっているのか、建物基礎の様子がどのようなものかを調べることにありました。これらの発掘調査は最終的にバンテアイ・クデイの修復にどのような方針で臨めばよいのかを探る資料を得るための調査でした。この調査は王立芸術大学の学生の考古研修を兼ねていました。約10年間調査して、ある一定のまとまった成果が出ました。

そこで次にどこを掘ろうかという話になりました。バンテアイ・クデイ境内は広大で、明らかにしたい地点が複数あります。その中で、バンテアイ・クデイに東から入りますと、日本の建築で言う参道に当たるようなものが見え隠れしております。その参道がどのようになっているかに以前から興味がありました。また参道の両脇に小さな建物があり、①その建物がバンテアイ・クデイ中心部と同時期に造られたものかどうか、また、②参道と建物がどのような順番で建てられたかという素朴な疑問から、この小さい建物の周辺地域を発掘してみようかということになりました。

バンテアイ・クデイの全体の様子を示します(図1)。この図面の真ん中のD01という点線で表されたものが参道です。そのD01のすぐ北側にD11という建物があり、このD11のところを掘ろうということになりました。図2に幾つか四角で囲まれ、黒く網がかかっている部分がありますが、トレンチと呼び、そこを発掘したわけです。この地域の発掘調査は2002年の夏を合わせると4回行いましたが、廃仏の仏像を取り上げた調査は3回です。大きくは2回なのですが、その前に前兆といえる1回目がございます。その3回の発掘調査を報告します。

## 2. 第1回目の発掘(2000年8月)

まず、1回目は、トレンチを6カ所設定し、掘り始めました。その中の第6のトレンチ、最もD11の建物に近い地区ですが、そこから偶然に仏像の1体を発見しました。トレンチを掘り下げていきますと、壁ができてきます。土の切断面です。第6トレンチの壁に1体見えてきたわけです。前柱殿付近を掘ってきた10年間では、時々ですが、砂岩の小仏像が出てきたり、青銅製の仏像が出てきたりしておりました。たくさんあるいは集中してではないのですが、出土しました。ですか

ら、1体見つかったとしても、偶然に何らかの事情で、土の中に紛れ込んだのだろうくらいにしか思いませんでした。ただ、この小彫像が壁にはまりこんでいる状況では、盗掘の恐れもあり、彫像の完全な形が残っているものですから、取り上げることにしました。

発掘調査期間の終了が迫っていましたので、その彫像の位置の測定や写真の撮影を実施し、どのような状況で埋まっているかなどの基本的なデータだけを記録して、取り上げました。すると壁の奥にまだ2、3体埋まっていることがこの1回目の調査で分かりました。

まだ、2、3体ありそうということが分かり、盗掘が心配でしたので、早速、警備体制を考えました。地元の警察の方々、発掘作業をしている何人かに現場近くに寝泊りしてもらおうという警備体制をとってもらうことになりました。残りの仏像を取り上げる作業は、かなり大掛かりなものになることが予想されました。2000年8月の時点では見えている仏像全てを取り上げることを断念し、次回以降で取り上げよう決めました。

### 3. 第2回目の発掘（2000年3月）

2回目の取り上げを伴う調査は2001年の3月に行われました。発掘作業というのは単に掘るということだけではなく、位置を示す図面、写真などの記録をとる必要があります。貴重な仏像であることが予想されたのに、取り上げた後の保存方針が充分ではなかったため、保管をどうするかも考えなければなりません。安全に保管できる場所、盗難を防止できるところを考えなければなりません。取り上げるということは現場の作業だけでなく、付随するさまざまな事柄がございますので、少し先に延ばして準備してからのほうがいいのではないかという意見があったわけです。しかし、見つかった以上、早く取り上げたほうがいいという意見があり、なによりも盗掘の心配がありましたので、2回目には見えている仏像を取り上げようという体制で臨みました。

それでも、仏像を取り上げることだけを目標としたわけではなく、D01、D11の様相を探る発掘作業の一環として取り上げる作業を行いました。底の方にあるということや、取り上げた後の態勢を整えることから、初めからどンドン取り上げるということは考えずに、発掘作業がある程度進んだ段階で取り上げ始めたわけです。

壁にへばりついていた何体かをまず掘り出すことから始めました。掘り下げ、何体かを取り上げてみると、奥にもあるということが分かりました。これは大きい作業になりそうということになりました。壁の横にへばりついている仏像を取り上げるだけではおさまらず、地表面から掘り下げなければならぬと判断しました。

そこで急速作業手順を切り替え、作業量が増えてしまうのですが、地表から掘り下げました。上から掘ったということは結果的には正しい判断でした。上から掘り下げた結果、見えている2、3体だけではないということに立ち至りました。しかし、掘り始めた段階では壁の中に見えているのが2、3体、その奥にあるとしても、そう数はないだろうと考えていました。

準備作業も10体か20体を取り上げる準備作業に留めていました。ところが、上から掘り下げてみると、10体、20体では取まりきらないことが分かりました。この時も調査期間の終了が迫っていましたので、非常に丁寧に物事を考えながら掘るというわけにはいきませんでした。

